
CLUMSY CLUMSY 3

~ START ALL

OVER AGAIN ~

K . F ドイル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

CLUMSY CLUMSY 3 ｝START ALL
OVER AGAIN ｝

【Nコード】

N2890W

【作者名】

K・Fドイル

【あらすじ】

お酒や恋にetc…
ズバリ大学生！

夜の騒動に、人質事件、何かと騒がしい大学生ジローとその友人達。

4年生に進級したジロー。ある人物との再会で苦い思い出と共にあ

る先輩のことを思い出す…

そしてその三年前、大学生でプレイボーイの松岡は新入生の一言で
あることを実行する…

現在と過去が交錯する、ゆるくてどこか抜けてる物語。

話しは少しだけ続き物になってます。前作の1と2そして2'5も
よろしくお願ひしますm┐┌()m

下手な文章ですが、読んでくれたらうれしいですm┐┌()m

不定期に掲載していく予定です。

シーン(前書き)

『追う男』

と

『追われる男』

どこかで観たような観ないような…

シーン

銃声が響いた

男はその銃声から逃げるように、コンクリートの壁に身を潜めた。男の額から汗が滴る。彼は手に握られた銃を強く握りしめた。相手の気配はなく、自分の息づかいだけが聞こえる。

.....

「.....終わりだ...隠れてないで、出てこい...」

冷淡な声が聞こえた。その声が自分に向けられているとおもつと男はゾツとした。緊張が募る。

再び銃声が響いた

男は驚くが、深呼吸をし、銃を構え直した。

「殺してやるから出てこい」
相手は言った。

決着をつけてやる

男は呟くと意を決し、自分の背で、盾となっていた壁から勢いよく飛び出した。

男の目と相手の目がしっかりと合った。どちらの銃口もしっかり倒すべき相手に向いていた。
引き金を…

パン

パン

パン

パン

銃声が鳴った

男は目を開けると、そこには血を流し倒れる相手が転がっていた。

「…俺の負けだ。せいぜい楽しみな」

相手はそう言っているとそれ以上言葉を発しなかった。

男は呼吸がなかなか整わない。

サイレンの音が徐々に近づいてきた。赤い光が彼らを包む。男の周りに数台のパトカーが止まる。そのパトカーからブロンドの髪長い女性が降りて、ぼろぼろになった男にかけよった。女性は男をねぎらった後、愛してるわ、そう囁くと男とキスを交わした。男もその女性求めた。

「お疲れさま」

二人は手を繋ぐと、赤いサイレンの光と、パトカーを背に歩き出した。

歩き出した二人が映るスクリーンをスタッフロールが流れ壮大な音楽が劇場を包んだ。暗がり動く人の頭や、エンディングを見ずに去っていく人影が見える。

タカハシシンジロウ

高橋伸次郎は大きく伸びをした。彼は仲間内ではジローと言われている。

この映画の感想はズバリ、面白かった。

しかし映画の大作2時間半は長い。90分がちょうど良いなどジローは思う。

それにジローは長編に向いていない劇場の客席の座り心地の悪さに少しだけ文句を言いたくなった。

面白くなかったの？面白かったの？どっちなの？

ジローは、この劇場の外で待っているはずの自分のカノジョにまた怒られる気がした。

そもそもジローとそのカノジョはたとえデートだとしても、観たいモノを観る、というスタンスだ。片やアクションと言えば、片やホラーと言った見方だ。恋人は恋人でも、観たいものは1人で観る。カップルや家族ずれにに囲まれても二人とも動じない。ある人は自由奔放なカップルと言うし、またある人は恋人未満とも言うし、大学の友人、堤つつみや山下ヤマシタには、おまえら別れたら？と、からかわれる。

しかしジローとカノジョにとつて、お互い放任主義な所は気に入っているし、カップルでベツタリと言うのは性に合わない。珍しい？そんなのかもしれない。ジローは少し考えると、座席から立ち上がった。上映時間からして彼女の方が先に劇場の外で待ってるはずだ。

そういえば映画の物語の中で、去っていった主人公と女性はその

後、どうなったんだろう？その後、2人は結婚して子供が産まれたり、あるいはなにかの拍子に別れたり、最後に倒した悪役の弟とかが現れてまた命を狙われたり、いろいろな事が頭に浮かんだ。それに物語の前は何があったのだろうか？

想像力を働かせるって言うのはこういう事なのか……

『想像力だよ』

そう言われたのを急にジローは思い出した。いや、昔言われたことがあるから、さっきみたいなことを思ったのかもしれない。少し昔のことだ。

とりあえず、カノジヨにこの話をしたら、キミは物語にのめり込みすぎだよ、と言われるだろうとジローは想像した。少し顔が緩む。

まあとりあえず！

食事でもしながら、今日お互いに観た映画についてカノジヨと語り合おうと思った。

3年前(1)(前書き)

三年前、お酒の席

3年前(1)

「…どうすれば口下手が治りますか？」

松岡は目の前の後輩の質問に困惑した。ザワザワとするこの居酒屋でも通る声での質問だ。松岡のジョッキビールを飲む手が止まる。テーブルを挟んで反対側に座る後輩の真剣な質問に答えが見つからず、彼は視線で助けを求めた。

「どうすれば上手く話せますか？」

いかにも垢抜けない風貌の坊主頭の高橋伸治郎タカハシシンジロウはさらに語尾を強めた。ジローと仲間からは言われているらしい。松岡はジョッキをテーブルに置くと、ジローの隣に座る彼の友人、堤ツツミに視線で助けを求めた。ポツチャリとしたその体格は痛々しい。

「……」

堤は皮から剥いたばかりの枝豆をムシヤムシヤと食べながら試合のレフリーのように事の経緯を見守っている。

「先輩、ジローにアドバイスお願いします」
堤は言った。

そんな堤の態度に松岡は舌打ちをしたくなった。

「…どうすれば女の子と仲良くなれますか？」
視線を反らさず、後輩は続けた。

…ああ、そういうことね、松岡は、最後の質問に彼の疑問、いや願望のすべてが詰まっている気がしてならなかった。所詮は大学一年生だ。

無意識に、自分の後ろの方で酔いつぶれ眠っている自分のカノジヨの方を見た。最近、うまくいかず、会う度に喧嘩ばかりの日々だ。松岡は浮気ぐせのある自分の責任なのは自覚している。そして、そのカノジヨになぜか肩を貸しながら眠っているのはやはりジローの友人、山下^{ヤマシタ}だった。後輩の割にはしっかり者だ。その彼も酔いつぶれ壁に押しつけられ眠っている。細身の山下には肩をかす行為は苦痛に見える。彼が苦悶の顔を浮かべてはいるが、松岡もなんだかそつちに加わりたくて仕方がなかった。というより、それは俺の仕事だ。松岡は思った。

「深く考えない方がいいと思うよ。そういうのってある程度は、自然と身につくものだとおもっから…」
松岡は後輩の方へ体を向き直すと言った。在り来たりなアドバイスに自分でも呆れてしまう。

「なるほどお…」

ジローはなんともマジメな顔で首を振った。一語一語噛みしめるように。松岡は今、自分のしゃべる言葉は、彼の将来に絶大な影響を

与えているような…そんな気がしてならない。

「うっ…そうだ！…聞き上手、目指そうぜ！」

松岡は重い空気を跳ね返そうと陽気に言ってみる。恥ずかしい…

枝豆を食べる堤が、明後日の方向を向きながら、堤が鼻で笑ったのがわかった。松岡はイラツとするのを堪える。あとで飲ませて酔い潰す！松岡は密かに後輩討伐の決意を固める。お酒には強いのだ。

「僕、聞き上手だからそこは問題ないと思います」
真剣な返事が返ってきた。

「…ああそうですか…」

松岡はそう言うしかなかった。攻守のバランスが悪いのか？そう聞きたかった。

「うまく話せません。特に女性と…でも僕、聞き上手だからコツさえ掴めばできると思うんです」

真剣な眼差しが松岡を見る。そんな目で見るなよ…

「じゃあさ、実践で鍛えない。今からワタシと話しましょう」
静香が会話に割り込んできた。松岡と同学年で、気配りができる笑

顔が素敵な女性、そう松岡は認識している。さっきまで違うテーブルでお酒を飲んでいたが、話す話題もつきて、こちらにきたのだから。

「おお、シズちゃん。頼むよ〜どうだい？高橋くん、慣れだよ慣れ！」

松岡は光明が見えた。

「いいっすよ」

ジローは静香の方に向き直った。

松岡と堤は2人を見守った。

「…じゃあさ、気楽に話しましょうよ。出身はどこなの？」

静香

「千葉です。静香先輩はどこ出身なんですか？」

ジロー

「東京よ。東京っていつでも都会からは離れてるげとね」

「でもいいですね。東京スカイツリーとか気軽に行けるじゃないですか？」

「まあね…」

静香は笑顔だ

言うほど喋れないわけじゃないようだ、松岡は2人を見る。

「あの先輩？」

ジローは言った。

「うん？なに？」

静香は素っ頓狂な声をだす。

松岡もジローが何か言いたそうなのがわかった。なんとなくだか彼の動く口元に目があった。

…す

す？

松岡は口を窄めた。

「好きです。僕のカノジョになってください」

「はい？」

静香は言った。

「はい？」

松岡が言った。

「告白？」

堤は言った。

静香は静かになった。

現在（1）（前書き）

映画を観た後、街中を歩くジローとユウコ。

現在（1）

『ウハハハハハハ』

そのメールの書き出しはそう始まっていた。丁寧に横文字も入っている。

『ウハハハハハハ』

今日は休みだな〜ジロー？

今、暇？オレ様はこれから、カノジヨとデートだ。ねえ〜うらやましい？うらやましい？

ウハハハハハハハ』

そして、送信者のカノジヨとツーショット写真が添付されている。ご丁寧に撮影されたのは今朝のようだ。

ジローは映画を観た後の携帯のメールチェックで、同学年の根岸ネギシからの写真付きメールを見てため息をついた。足取りが重くなる。

「どうしたの？ジロー君？」

映画館の劇場から出ると自分の観た映画のパンフレットを持って、ジローのカノジヨのユウゴが待っていた。ポニーテールでカノジヨの存在がすぐにジローにはわかった。

「いや…別になんでもない。どこかでご飯食べようか？」

表情に自分の憂鬱が出てしまったことを後悔すると、ジローはユウコと映画館を後にした。

根岸はジローと同じ大学4年で、学年1位の成績を持つ男だ。なぜかジローを気に入っているのか、ただ面白がっているのか、大学で顔を合わせる度に妙な笑い声をしながら絡んでくるめんどくさい男だ。長い髪にメッシュがかかっており、ジャラジャラとチエーンをならしながら歩く、そしてその笑い方がジローに取って不快でしようがない。今回は独特の笑い方がメールにまで反映されている。ジローは呆れた。

そしてなぜ、根岸自身のデートを送ってくるのか理解できない。ユウコが楽しそうに自分の映画の感想を述べたりしてるのを聞きながら、ジローは思った。

「そういえばジローくん髪の毛伸びたね」

ユウコが唐突に言った。街中を歩きながらジローのセットされた髪を触る。女の人のボディタッチには中々慣れないジローは少し肩に力が入る。ジローの身長はユウコの頭一つ分高い。彼女はジローの事を見上げる形で、髪を触るようになる。

「そうかな」ジロー。

「うん、切った方がいい。長すぎて似合わないよ」

ユウコ。なんだかジローは母親に言われているようだった。

「そうだね。でも一時期坊主にしてた時もあったんだよ。ホラ1年生のとき」

「そうなの？逆に似合わないそうね」
問って難しい、ジローは思った。

「…一年生の時か、松岡さんとか元気してるかなあ？」
想像力だよ！

ジローは呟くと、不意に先輩、松岡の言葉が浮かんだ。

「想像力…」

「どうしたの？」

「いやなんでもないそう言えば、ユウコ、松岡さんって今、なにや
ってるか知ってる？」

ジローは言った。

「松岡？」

「ほら、3つ上の先輩」

「うん知らない。と言うかワタシまだ大学にいなかったと思うけ
ど…」

ユウコは困った顔をする。

「…そうだった。卒業したあとだ、どうしてるかな、松岡さん、ま
あいいや、なにか行きたいところある？『テンカ』にする？」

『テンカ』はラーメン屋でジロー達が行きつけのラーメン屋だ。お酒を飲んだ後は必ずと言っていいほど利用する。マジメな店長のおじさんに、ジロー達から見たらおねーさんの存在にあたる奥さんで切り盛りしてる。締めラーメンに相應しい味だ。

最近、2人の間に子供ができ、お店は別の意味でぎやかだ。

「うーん、今日はさっぱりしたものを食べましょうよ」
悩む仕草をすると、ユウコは言った。

「そうかーじゃあ…」

ジローは考えた。歩きながらユウコと同じ姿勢になっているのに気づかない。

「…ジローくん…かしら？」

不意に2人は女性に話しかけられた。街の風景だったはずの人混みが、自分たちに話しかけてきたので、2人は驚いた。

「ジロー君よね？ホラ私よ」

優しそうな笑顔。昔、見た時より髪の毛が長い。

「…静香先輩？」

ジローは驚く。

「元気そうね？」

「ええまあ…静香先輩は？」

「元気にやってるわ」
笑った顔は相変わらずだ。

「今は確か…就職？」

「ええ…」

彼女は頷くと、少し有名な企業の名刺を財布から取り出し、ジローに渡した。

「あ、どうも！」

『くほしずか
久保静香』

名刺には名前と肩書き住所などが書かれていた。たった一枚の名刺でその人の社会での立場や位置付けがわかってしまう。

『想像力だ』

ふいにだれかに言われた言葉がジローは頭に浮かんだ。松岡さん？

「そちらは？」

名刺を覗きこみ考え込むジローに静香がユウコの方を向いて訪ねた。

「あ！えっと…」

ジローは、急に訪ねられ、ユウコが戸惑っているのがよくわかった。

「ぼ、僕の彼女です」

ジローは言った。

「どうぞよろしくです」

なぜかユウコは恐縮してしまつた。

「よろしく……ふんあのジローくんは彼女があゝ、へえ」

静香は少し意地悪い眼差しをジローに向けた。

しかし、昔と変わらない優しさも混ざっている気がジローにはした。

「ま、まあいろいろな事がありましたからね」

ジローは頭を掻きながら答えた。自分でも心当たりがある。

「いろんな事？」

ユウコがジローの顔を見る。

「ははは、静香先輩、そ、そりゃねありますよね。そういえば、卒業したあと、松岡さんとか今どうしているんですか？」

ジローはさつき頭に浮かんだ先輩、松岡の名前を出してみる。

「……ま、松岡くん？……だつて彼は……」

静香の答えは、さつき見た映画を超えるものだった。

「亡くなったらしいわよ……」

ジローはなんだか街中が静かになった気がした。

3年前(2)(前書き)

昼下がりに、とある駅前で松岡とジロー達。

3年前(2)

なんであんなこと言ったんやろか？

松岡は心の中で思った。

松岡は関西出身だ。

今は大学に入り、標準語の世界に順応している。というより少し自分をそこに合わせないとバランスが取れない、そのせいもあるのかもしれない。時々、地か出てしまう。頭の中、そして言葉に。

駅前の噴水の前で松岡はジロー達を待っている。人で駅前は賑わっている。天気がいいせいだろう。

飲み会での彼の唐突な発言、あれには焦った。静香は苦笑いで、

『冗談だよね？』

と聞くが彼は、

『いえ冗談は聞き上手には言えません』

なんて言うものだからその場はさらに緊迫した。静香はその後、苦笑いで、ゴメンね無理だわ、と言って去っていった。包容力のある優しい笑顔が特徴の静香が苦笑いだ。静香が引くのもよく分かる。ただその後、俯き本気で悩んでいる彼を見て松岡は思わず言ってしまった。

「そんなに落ち込むなよ。今度、俺が女の子との接し方、街で教えてやるから」

松岡は不味いと思った。めんどくさいことになる。そう思った。その瞬間、

「面白そっすね〜俺も一緒にいっていいですか？」

なんてデブの堤が言うものだから困った。

「僕も行きたいです」

酔いつぶれ、寝てたはずの山下までさういう。なんだか少しだけ嬉しくなった松岡は

「おし！任しとき〜今度の日曜駅前に集合なあ〜
女の落とし方見せたるわ〜」
つい里の言葉が出てしまう。

「ナンパやナンパ〜」

松岡は少しだけ調子に乗った。

「ありがと〜ございます」
坊主頭をこちらにむけて頭を下げるジローに松岡は気持ちよささえ
覚えた。

「せやな〜」

松岡の方にビクツと力が入る。山下の横で寝てた彼女は、不適に笑いながら松岡の隣に座っていた。

「懲りない男やね〜別れましょう?」

松岡の影響で会話に関西弁の混ざる松岡のカノジョは言った。目が笑ってなかった。そして

強烈なビンタ

どこの女も怒らせると怖い。

その後、カノジョにメールアドレスは変えられ、電話番号は変えられカノジョの中から存在を消された。別れてやっだ。松岡は呆然とするしかなかった。

そして今、松岡は日曜日の正午過ぎ、大学のある最寄り駅の噴水の前でジロー達を待っている。水しぶきが必要以上に飛んでいる。待ち合わせ場所を間違えた、そう思い始めた頃、ジロー達がやってきた。最近の後輩は時間にルーズらしい。

「チワっす!」

「チース」

「こんにちは！」

松岡に三人はなんとも高校生や中学生の部活を思い出させる挨拶をしてきた。それぞれバラバラな挨拶なのだか、松岡にはそれが気持ちよかった。

「よお〜遅かったじゃんか〜」
松岡。

「どうもすいません、ジローのやつが準備に手間取って」
堤が言った。

「いやお前が服選びがどうか…」
ジローが反論する。

「まあまあ先輩の前だろ」
線の細い山下が2人の会話に割り込んだ。細いよな彼、松岡は思った。

「うるさいな、お前だって靴が合わせずらいとか最後まで言ってただろうが」
ジローは言った。

「そうだ、そうだ！今日は天気いいからブーツかスニーカーにするか散々迷った拳げ句、お前サンダルじゃないか」
堤は唇を突き出しながら言った。松岡はポツチャリとした彼の顔がさらにふくよかになった気がした。

「いいじゃんか！この方がらくだよ。てか堤、お前は体型考えるよ
くそのカーディガンは小さすぎるぞ」

山下は方をすくめる。ちなみに堤は赤茶のカーディガンを、山下は
黒のベストをTシャツの上から羽織っている。

「ぱつつんぱつつんだぞ！」

「うるさいな」

「まあまあ2人と、服装のことはもういいだろうに」

ジローが2人をたしなめる。その雰囲気は、どこか2人を達観して
いる。坊主頭がなおさらそう見せるのかもしれない。

『一年中スウェットが何言ってやがる！！！！』

堤と山下はジローを見据えると揃ってそう言った。3トリオ、思
わずそんな言葉があてハマりそうだ、松岡は少し可笑しかった。

「この黒のスウェットはなあ…」

ジローは自分の着るスウェットの裾を引っ張って解説を始めようと
している。

「…そろそろ行かへん？」

松岡はタイミングを見計らい口を開いた。

「そつつすね」

堤は頭を掻く。

松岡は3人を引き連れて歩き出した。

「これはマルイのバーゲンで…」

ジローは歩き出しながら、いかに自分のスウェットが上質か語り出した。

とりあえず今はどうでもいいだろう？ そう思ったが、可愛い後輩にはそう言わなかった。

現在(2) (前書き)

飲食店でのジローとユウリ。

そして電話、

そして…

現在（2）

松岡が亡くなった？その言葉を聞いた後、静香は風の噂だけどね、そう念を押すと彼女は、

「2人とも仲良くね！お似合いよ」

そう言い残し、ジローとユウコの前から去っていった。

「……」

ジローは思わぬ不意打ち言葉が出ない。静香の一言はジローを黙らせるには十分だった。

「ジローくん？大丈夫」

ユウコがジローの顔を覗きこんだ。

「…ああ、ご飯どこいこうか？」

「大丈夫なの？」

「平気だよ」

ジローは言った。

「ご飯どこで食べようか？なんか俺ガッツリ食べたいなあ」

「…そうだね、お腹減ったね」

「ユウコちゃん…実は焼き肉食べたいんだけど？臭いうつるかもしれないけどいい？」

ジローは控えめに言った。

「フフ、いいよ行こう」

ユウコは微笑んだ。2人は歩き出した。

焼き肉か…松岡さんが好きだった。焼き肉といえば堤、なんとなくだが、お店の席で待ちながらジローは彼に電話をかけてみた。ユウコは向かいでチョココンとおとなしく待っている。

『もしもし』

ダルそうな声が聞こえてきた。

「おう！今ナニしてんだ」

『アンス杏子の家だ』

「そっか」

杏子はジローと同じサークルで、堤の彼女。ショートカットのま
あなんと言うか胸が大きい、そしてそれを武器にしているのか、確
信犯なのか、それを強調した格好をいつもしている。いつもジロー
は出会うとドキリとしてしまう。

『なんだ？どこ遊びにでも行くか？』

堤が少し期待を込めた声で言った。

「いやちよつと聞きたいことがあってな」

『なんだよ急に〜杏子は俺の彼女だよ』

堤は言う。

「いや別にそれはいいんだけどさ…」

電話の音の後ろから、何々？と杏子の声が出た。

『ああ』

「松岡さんって今どうしてるんだ？」

『はあ？何行ってるんだよ』

呆れた感じで堤が行った。

「いやさ、今ユウコと焼き肉屋にいらただけど、そしたら松岡さん
のこと思いで出してさ〜どうしてるっけ？」

ユウコが箸と皿を自分の前に置いてくれた。ジローはすまないとい

う仕草をする。

『う〜んそういわれれば…大手の企業に就職したんじゃないかな確か？』

堤ははつきりとは答えられない。

「そうか？亡くなったってことはありえる？」
恐る恐る聞いてみる。

『そうなのか?!』
堤が動揺した。

「だよなあ〜驚くよなあ〜気にするな噂だ」

『なんなんだよ〜一体…うわっ?』

堤の音がそこで途切れた。

『もしもしジロー君かしら?』
杏子の声だ。

「あれ?杏子」

『そうよ。松岡さんのことだけど…』
威勢の良い声だ。

「うん」

『確か海外に留学したのよ。親のコネ使って』

「そつなのか？」

『噂だけどね』

噂か…またか、ジローは思った。

『コラ！オツパイを触らない。まずは痩せなさい』

杏子が叫ぶとゴスつと言う音がした。多分、悪さをしようとした堤を携帯で殴ったのだろう。イチャイチャしたいよお〜と嘆く堤の声が電話口で聞こえた。ジローは苦笑してしまい、運ばれてきた肉を焼き始めたユウコの胸元を見てしまう。

「い、いやなんでも」

ジローは目を反らした。

「視線がいやらしいんですけど？」

ユウコは可愛らしい笑顔だが刺すような目でジローをみた。

「な、なんでもないよ」

『どつしたの？』

杏子の心配そうな声が出た。まったく男って奴は！…ああ、俺も男かとジローは思う。

「いやこつちの話。じゃあ堤に早くまた痩せろって言っついて」

『ふふわかった。じゃあね』

電話は切れた。

「どつだった？」

ユウコ

「あんまりわからなかった。みんな勝手に想像してる。風の噂は怖いなあ」

ジローは噛みしめるように言った。

「そう。焼けたよ」

そついうとトングでジローの皿に肉を盛りつけてくれた。

「お？サンキュ！……旨いなやっぱり〜うんコレ、カルビ？」

「上カルビ。ジロー君の奢りね」

ユウコは笑顔で言った。八重歯が覗く。

「お金ないよ〜」

ジローはお手上げた。

「嘘だよ。頼んだのアタシだから奢る。この前たくさん働いたから今月バイト代多めなんだ」

ユウコはパスタ屋で店員のアルバイトをしている。あそこではいるあつたとジローは思った。

「わざわざだれかにとって買ったのか？」
ジローはメールを見ながら、思わず声にでてしまう。

「どうしたの？バイト？」
ユウコが心配そうに言った。

「いやなんでもないデザートは俺が奢るよ」

「あら！嬉しい」

ユウコが笑った。

現在(3)伊達(前書き)

現在。ラーメン屋テンカにて、伊達とおじさんのやりとり。

現在(3) 伊達

暖簾を潜った瞬間、もわつとした湯気が伊達を包んだ。スーツの赤いネクタイを緩めた。伊達は、学生時代からこのラーメン屋に入った時のこの空気が嫌いだ、その奥で迎えてくれる店主のラーメンには目がなかった。

「いらつしゃいゝおお久しぶりだなあゝダンテゝ」

この店『テンカ』の店主、通称おじさんが伊達を迎えた。おじさんは伊達を大学時代から知っており、あだ名で彼の名を呼ぶ。ちなみに今、伊達は卒業した大学で講師をしている。

「どうも、おじさん元気？」

カウンター越しにおじさんに言った。

「ああ、おかげさんでな、いつものかい？」

「うん、麺普通で」

伊達は普通を好む。何事も普通が一番だ。

「はいよ」

おじさんは、麺を茹で始めた。大きな鍋から上がる湯気に麺が吸い込まれていく。

「…よろしく」

ラーメンの出てくるまでの沈黙、伊達は嫌いではない。お腹が減る。

「……そういえば奥さんは？」

奥さんはおじさんにはもったいないくらい綺麗な女性だ。確か学生のジローが有名な女優さんに似ていると絶賛していた。

あああああああ

奥から奇声とも思える鳴き声が聞こえた。伊達は思わず肩に力が入る。

「よしよし」

厨房の奥から生まれてまだ数ヶ月の赤ん坊を抱いて奥さんが現れた。伊達は奥さんに出産後初めて会うが、その変わらなさに驚いた。相変わらずの綺麗さだ。むしろ母になり磨きがかかったような気がするが…

「あら、伊達くんじゃない？元気してた？」

奥さんはいつも愛想がいい。ガラの悪いおじさんと並ぶと、バランスが取れている。

「ええどうも、久しぶりです。いつのまにお母さんになってたんですね」

伊達は言った。

「そうね〜時間が経つのは早いわね」

赤ちゃんがおとなしくなったのに伊達は気づいた。

「話には聞いてましたけど…」

おめでとうございます」

伊達は頭を下げた。

「ふふありがとう。子供が増えて困ったわ」

奥さんはラーメンの盛りつけをするおじさんをチラリと見た。

「な、なんだよ！俺がガキだったのか！」

おじさんは動揺する。

「だれもそうは言ってないでしょ？」

奥さんは笑った。

「そうつすよ〜」

伊達も楽しそうに言った。

「ふ、ふん！俺は子供だよ！」

おじさんは出来上がったラーメンを伊達の前に置きながら言った。

「あら〜かわいい」

奥さんはニヤニヤしながら言った。

「か、か、かわいくなんかない…」
おじさんは動揺し、顔が赤い。

「なに言ってるの？この子よ」

「な、な、う、うるさい〜チキシヨウめ」
おじさんは力なく言った。

「でも同じぐらいアナタもかわいいわよ」
奥さんはさらりと言った。

「うっ…うるさい…」

「おじさんはタジタジだ。」

「まあまあ、そんなにいったらおじさんおかしくなりますよ」
伊達は2人の光景を見て微笑ましかった。

「フン〜」
おじさんはソッポを向いてしまった。耳が赤いのが伊達にもわかった。

「この子寝たみたいだからまたね！伊達くん」
奥さんに抱かれて赤ちゃんは眠っている。2人とも厨房の奥へ去っていった。

「…まあ子供ができてまあんな感じだようちは〜」
おじさんは言った。

「ふふそうっすね…あ、テレビ付けてもいいですか？」

伊達は上着を脱ぐとカウンターに置いてあるリモコンに手を掛けて伊達は言った。ラーメン食べながらテレビ、これ最高だね、伊達の持論だ。

「…いいぞ」

おじさん

伊達はリモコンをカウンター脇にあるテレビに向け、赤いボタンを押してみた。画面左下に光る赤いライトが緑に変わり、うっすらと画面が浮かび上がる。

『3月11日の…』

音声が届いてきた。3月11日……

テレビから聞こえてくるこの重い日付に伊達とおじさんは顔を上げてしまう。

どこかで室内が激しく揺れ棚などが倒れ、机の下に人が避難する映像、激しい津波が街を浚っていく映像、誰の責任でもない自然のチカラ、大地のチカラ。

東関東大震災…

テロップが流れ、映像が順番に映る。

「……だいぶたつたな」

画面を見ながらおじさんが言った。

「ええ、でもまだまだ記憶は鮮明ですよ」

伊達は呟くように言った。人間には幸い忘れる力がある。

しかし、忘れてはならない、むしろ心のどこかに止めておかななくてはならないこともあるのではないか？これは教訓というのだろうか？伊達は思った。

「なあ、ダンテ！」

おじさんが呆然とする伊達に話しかけた。

「…はい？」

「…ラーメンが伸びるぞ」

おじさんは言った。

「あ、ああ…いただきます」

伊達はワイシャツにスープが飛ばぬよう腕まくりをするとラーメンを啜り始めた。ラーメンを啜る音が店内に響いた。

……

ガタガタと店の扉が開いた。

「グハハハハハ」

おじさんラーメン2つね〜あっ！待って麺の堅さは…」

伊達とおじさんは現実世界に呼び戻された気がした。髪にメツシユのかかった男が、女性を連れて来店してきた。ジャラジャラとチェーンが騒々しい。

伊達はちらりとその方向を見ると、職場の教え子の学生であることに気づく。どうやらデートのようだ。確か彼は根岸？半信半疑だが、名前を思い出した。成績のよい生徒だ。カノジヨと麵の堅さをどうするかを真剣に考えているようだ。

楽しそうだ。

「うははは〜麵柔らかめで〜ミホちゃんもそれで」

「うん、冒険してみよう」

伊達の耳に、ミホちゃんの可愛いらしい返事が聞こえた。

それを聞くとおじさんは麵を茹で始めた。何が冒険なのかは、伊達にはわからない。

伊達は再び麵を啜り始めた。麵を咀嚼しながら、伊達は替え玉を注文するタイミングを考える。

真剣に考えている自分がなんだかおかしかった。

「おじさん！何事も普通が一番！だけど……」

今日は替え玉麵堅めで」

「…あいよ」

おじさんは伊達の注文に珍しさを覚えたようだった。

伊達はジブンのルールを破ってみることにした。

「『だけど』の後が肝心だよな？」

おじさんは笑った。

3年前(3) (前書き)

三年前の駅前

3年前(3)

松岡はいつもの要領で人の集まる時計塔の前のベンチに陣取った。ベンチに座り上を見上げると時計の針が見える。時刻は1時当たりを示していた。

ジローが松岡の隣に座り、その隣に細身の山下が座った。堤は横で立っている。

「先輩、何するんですか？」

堤が腕を組みながら松岡に尋ねた。

「…ジロー！お前話しかけるのが苦手なんだよな？女に？」

「まあそうですね。でもこの前も言いましたけど…」

そこまで口が動くとき松岡は手でジローの口元を制した。思わず攻守のバランスが悪いのか？と口に出そうになる。堤と山下は面白そうに見ている。

「いいか？そんなの出来ても仕方がないんや。まずは女の人でも男の人でもいい。会話のキャッチボールができへんと意味がない。ミット構えてるだけじゃあ、取って終わりや！」

松岡は気がつくとき関西弁が出ていた。そろに気づかない。

「な、なるほど」

ジローは納得しているようだ。

「さすがやなあ〜センパイ〜いいアドバイスやで〜」
堤がイントネーションがメチャクチャな片言の関西弁を話した。松岡は思わず力任せに堤の肥えたお腹を、力一杯グーパンチによる制裁を加えた。エセ関西弁ほど関西人のカンに触る者はない。

「グフ…ゲホすんません」
堤

「わかればいい」
松岡は言った。

「おこしやす〜」
山下が呟いた。

「…それは京都や」松岡は山下を睨む。しかし呆れておこることできない。山下はスイマセン、と言つと苦笑いだつた。

「どげんかせんといかん！」
ジローが突然叫んだ。

「……それは宮崎や」
松岡は呆れるしかなかった。

「とりあえず、どこでもいい！初対面の人に道を聞いてこい！会話は最低でも6回はやりとりを続ける。なるべく女性にしろや〜！」
松岡は言った。

「は…はあ」
ジローは半信半疑のようだ。彼はベンチから離れ、人混みの中へ歩き出した。松岡達はそれを見守った。

……………

人混みの中、ジローは1人立ち尽くしている。

「センパイ！アイツ放心状態ですよ」

山下がジローを指さした。

「じゃあないなあ〜」

松岡はため息をつくくと、ジローの立ち尽くす人混みへ向かった。

「……………」

松岡がジローのそばに近寄って行くと、人混みの流れに翻弄されているジローの姿がそこにはあった。目をキョロキョロさせて人に話しかけるタイミングを見計らっているようだ。松岡はそんな彼の背中を叩いた。

「おい！」

「ひっ！」

ジローの肩に力が入るのがわかった。あんな堂々としてる男がこの様だ。松岡は少しジローの一面に笑いそうになる。

「ジロー、目星をつけて話しかけやすそうな人にいきなさい」

「はあ〜…」

「う〜ん…どの人がいいかあ〜…あ！あのオバハンはどうや？」

そう言うと少し小太りでめがねをかけた50代ぐらいの女性の方を見た。

「え？ああ〜えつと〜…」

ジローは困る。

「威勢が悪いなあ〜仕方ない。俺がお手本をみせよう」

いつの間にか松岡は標準語に言葉使いが戻る。

松岡は駅前で待ち合わせをしてると思われる女性の元へ近づいていった。

「あ〜」

松岡

「はい？」

話しかけられた相手は怪訝そうな顔をした。女性は少しだけ顎がふくよかだ。

「道を聞きたいのですが？」

松岡は質問を投げかけた。女性は少しだけ警戒を解いたらしく表情が緩んだのがわかった。

「はい」

返事が返ってきた。

「このあたりに交番ってありますか？」

松岡は言った。

「交番ですか？…え、反対の西口にありますよ。行けばすぐにわかりますよ」

おばさんは笑顔で言った。

「なんかすいません。道に迷ってしまいました…待ち合わせですか？」

松岡は訪ねた。

「ええまあ、家族と待ち合わせです」
戸惑いながらも女性は答えた。

「そうですか。ご親切にありがとうございます」

そういうと松岡はニコリと笑顔を作り、頭を下げてその場から去っていった。

「どういたしまして」

女性の声が松岡の背中に届いた。

そのやりとりの後、すぐに連れの女性が来たらしく女性は去っていった。娘だろうか？松岡は思った。

松岡は少し後ろで見ていたジローの背中を叩くと人混みの少ない壁際に彼を連れていく。

「どひゃ？」

松岡

「はい」ジローはポカンとしている。

「この要領でいろんな人に聞いてみな、会話らしい会話になるから」

「はあ」

「目標10人。俺がついてるから安心しろよ」
松岡は言う。

「わかりました」

ジローはそういうと人混みの中、話しかける相手を捜し始めた。

「がんばれ」

松岡はジローの少し後ろをついて行く。

「せ、せいません…え？あ？いや？…：…すみません、交番の場所知ってますか？」

ジローは俗に言う挙動不審と言われる状態で、高校生と思われる少年に話しかけた。少年の右手にはジロー達の通う大学のロゴの入った袋が握られていた。ジローは気づかないようだが、松岡はチラリとロゴを見ると、大学のオープンキャンパスに来た高校生だとわかった。男子高校生は少し驚いた素振りをする。

「え？あ？あの…この辺のこと知らないんですけど…」
男子高校生は戸惑いながらもそう答えた。

「そ、そうですか。今日はお出かけですか？」

ジローは言った。松岡は思わずジローの方を見てしまう。

「え？あゝえつと…：…そうですね。大学のオープンキャンパスでした」

この高校生は優しいな、松岡はジローの横で思う。

「そうですか。ご親切にありがとうございます。よい一日を！」

ジローは精一杯の笑顔を作り、その場を去っていく。松岡は心の中で頭を抱えながら、高校生にペコリとお辞儀をし、その場を去って

いった。

「どうですか？」

ジローは松岡に訪ねた。

「うんまあいいんじゃない、数をこなしていこうよ！ホラ次々」
松岡はジローの背中を押した。堤と山下の待つベンチの方を見ると、彼らは退屈そうだ。松岡はタメ息をついた。松岡はジローの方に目を移した。

「すみません。よろしいですか？」20代後半ぐらいだろうか？大人っぽい女性にジローは話しかけた。少しだけ体のスタイルの良さが強調された服を着ている。というか強調され過ぎじゃ？松岡はそちらの方に目が行きそうになった。

ジローに対して少し警戒する素振りが見られる。

「はい」

女性

「この辺に交番はありますか？ありましたら道を教えてもらえませんか？」

ジローはさっきより柔らかい物腰で女性と接している。松岡は慣れしてきたジローを見て少し嬉しい。

「ああ、え〜とですね」

女性はジローに丁寧に道を教えた。松岡はそのやりとりを静香に見

守る。

「ありがとうございます。今日はお出かけですか？」
「通り教えてもらった後、ジローは訪ねた。」

「ああ、ええそうですね。ショッピングです」
女性はジローの質問に恥ずかしそうに答えた。

「そうですか…」

ジローは相づちを打つ。松岡はもう終わりだろうと、その場を立ち去る心の準備をした。

しかし、ジローの口がまだ何かを言おうとするのに気づく。

「あゝ」

ジロー

「はい」

女性

「…好きです。結婚を前提につき合ってください！」
ジローは頭を下げた。

「え？」

松岡

「はい？」

女性

ジローは真剣なようだ。松岡はベンチの方で堤と山下がニヤニヤしながらこちらを見ているのに気がついた。

松岡は深いため息をつくしかなかった。

現在(4)(前書き)

ジローとユウコは街中を歩く

現在（4）

『ウハハハハハハ』

今、オレ様はミホちゃんと一緒に「テンカ」ってラーメン屋にいるぞ！このラーメンは旨い！おまえも来いよ。まあフットワークの重いジローには来れないけどな。ウハハハハハ』

羨ましい？羨ましい？羨ましい？羨ましい？

グハハハハハハ』

根岸からのメールの文章はそこで終わり、ラーメン屋「テンカ」の店内と思われる写真がそのメールには添付されていた。ジローはため息をついた。何がしたいのかわからない…

そもそも根岸とミホちゃんのカップルはジロー達が入学当初から有名なカップルだった。よく笑う根岸、それを嬉しそうに眺めるミホちゃん…

不思議だ

そう考えると、ジローは焼き肉店の前から歩き出した。後から会計を済ましてきたユウコはお店の前から、小走りでポニーテールをなびかせながら、歩き出したジローの横に急いだ。手にはお店で貰ったキャンディが握られている。

「またメール？」

ユウコがジローに追いつくと訪ねた。

「まあね」

ジローはボタンと携帯を閉じた。スマートフォンに切り替える勇気がジローにはまだない。

「デザート美味しかったよ」

ユウコは笑顔だ。笑うとでるその八重歯にジローは弱い。

「どういたしまして」ジローも笑った。俺はバカなのかもしれない、ジローはジブンを少し疑ってみる。

答えなし…かな？

「ねえ？」ユウコは言った。

「うん？」

ジロー

「松岡さんってどんな人だったの？」

ユウコは訪ねた。

「いい人だよ。俺に大切なこと教えてくれたんだ」

「ふん。そうなんだ。なにを教えてもらったの？」

まるで子供が欲しいものをねだるような、そんな雰囲気ですユウコは訪ねた。

「…うん難しいなあえて言うなら『想像力』かな？」

ジローは空をみてる。雲はあるが空は青い。

「なにそれ？」

ユウコがそう言った瞬間、ジローは目の前の駅前の広場で足を止めた。今も昔もと変わらぬ時計台といくつか並べられたベンチ、やんちゃに友と走り回った日々が浮かんできた。少しだけ時計台の土台がズレ傾いている。けジローは過去の地震の凄まじさに恐怖を覚える。

しかしその時計は時を刻み続けているようだ。それを確認するとジローはなんだか安心する。

変わったといえば駅に隣接する8階建てほどのデバートの壁に、巨大なスクリーンが備え付けられあり、テレビの情報番組を絶えず流し続けているくらいだ。歩く人びとが時折、足を止め、そのスクリーンを眺めている。

「ねえ？あれ見て」

ユウコがジローの肩に手を掛け、頭上のスクリーンを指さした。心なしかユウコの顔は哀しそうだ。ジローはその指先の奥にある物を眺めた。

どこかのテレビ局のオフィスだろう。画面が激しく動いたと思うと、オフィスで働いていた人たちが一斉に机の下に隠れたり、その場に踏ん張ったりしている。本棚が倒れ、頭上から物が落ちる。様々な物が散乱した室内、画面が揺れの収まった室内を静かに映し出す。

東京の機能は一時的に麻痺し、帰宅できない人が路上で一夜をあかす

はっきりしない政府の対応

電力会社

ネットに飛び交う様々な情報

思わずフォローしてしまうような情報

眩かなくてもいいような情報

正しい情報

本物はどれ？

混乱

ジローはスクリーンに映し出された映像を見て当時の事が脳裏に浮かんでいくのがわかった。

スクリーンを見ずにその前をただ横切る人、足を止め携帯を開きチラッと頭上のスクリーンを見る人、思わず足を止める人、楽しそうに歩く人、どれも正しい、ジローは思う。ジブンもそうだ。時には忘れないとやっていけないこともあると思う。

いいわけかなのかな？ジローは考えた。

「ねえねえあれってさ？」

ユウコがジローの肩を叩いた。もう片方の手で指をさす。指をささない、なんて言おうかとジローは考えたが彼女の指先が指す方を見ると思考がそちらの方に傾いた。

「根岸？」

ジローは名前を呟いた。それを知ってか知らずか根岸はジロー達の方をみるとニヤリと笑い近づいてきた。できれば関わりたくない今は！ジローの心の叫びとは裏腹に、ズボンから垂れ下がった不快なチェーンをジャラジャラと鳴らしながら根岸がジローの元に近づいてきた。根岸に腕組みをしている ミホちゃんも一緒に…

先刻からのメールのせい、妙に2人の存在をリアルに感じられ

ジローは苦笑いをするしかなかった。指を指すポーズのまま一緒にいるユウコも苦笑いをするしかなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2890w/>

CLUMSY CLUMSY 3 ~ START ALL

OVER AGAIN ~

2011年11月20日19時48分発行